

## 沙流川流域の景観保全と活用 —豊かな河川環境を未来へ—



Landscape Conservation and Utilization of the Saru River Basin

特定非営利活動法人 沙流川愛クラブ

事務局長 <sup>ひらむらてつろう</sup> 平村 徹郎\*

HIRAMURA Tetsurou

### はじめに

沙流川は日高山脈北部の熊見山（標高1,175m）に源を發し、日高町・平取町（旧3町）を南西に流れ太平洋に注ぐ一級河川です。

源流部の日高山脈はこのほど国立公園化が予定されており、原始河川の形態や自然環境を残しつつ、同時に現代生活とのバランスを維持し続けている河川といえます。

沙流川の語源は、アイヌ語の「サラ」Sar=葭原（よしはら）とされ、主に中下流域の特徴に由来するとされています。

産業の開拓は、上流域では原始林の伐採・育林が明治後期に始まり、大正期からは鉱物の産出拠点として歴史が刻まれました。

一方、農業では上中流域で酪農・牧畜、中下流域では水田を主体とした農業が展開されました。

下流の段丘上では涼やかな気候を生かした馬産が盛んとなり、昭和40年代には競走馬（サラブレッド）生産の一大拠点として知られるに至りました。

現在は山地での林業や段丘上での酪農・牧畜、かつての氾濫原で展開される水稲やトマト・きゅうり・イチゴなどの施設栽培が盛んであり、シシヤモに代表される日高前浜の水産資源は、日高山脈から流れる豊富で清廉な流れと、沙流川が運ぶ土壌に育まれたものであり、いずれも沙流川とその流域の恵みの上に成り立っています。

### 沙流川愛クラブ

NPO法人沙流川愛クラブは沙流川との共生をテーマとした住民活動として、平成13年に設立されました。平成18年の法人化を経て、令和4年で設立21年（法人化15年）を迎えました。



沙流川下流域と太平洋

地域住民は沙流川に飲料水をもとめ、産業基盤は林業や農業、そして前浜での水産業と流域のポテンシャルの上に成り立っており、限りない沙流川の恵みを活かし共生することを目的として沙流川愛クラブが創設されました。

山から海までを一筋の流れ（沙流川）で結び、住民生活と自然環境をあらためて認識し、親しみを深めることが活動の主なテーマとなっています。

以下に沙流川愛クラブが主催してきた活動を紹介いたします。

### 河川清掃

創業当初から、沙流川の上・中・下流域で河川清掃を実施してきました。これには会員のほか、地域住民、漁業関係者、河川工事関係者、河川管理者などが参加して、大勢での清掃作業を行います。

漁業関係者は胴付長靴をはいて、腰まで水に浸かりゴミを拾う光景も見られます。

また、高校生ボランティア部やスポーツ少年団の精鋭も加勢してくれます。

彼らの代にもこの清廉な流れを残すべく、また、未来の愛クラブの担い手になってくれえることを期待しつつ、一緒に活動に励んでいます。

\*令和4年河川功労者表彰「第4号 河川の自然保護・環境学習・河川愛護等の活動に功績があった場合」（団体）



河川清掃・せせらぎ公園

創設当初は、トラック数台分のゴミを搬出することもありましたが、今ではポリ袋で数袋ほどにゴミの量が減っています。

国土交通省が発表する全国水質ランキングでは常に、最高位クラスに位置づけられており、この水質を後世に残すことが今を生きる我々の責務であるとして、活動に励んでいます。



スポーツ少年団が参加しての清掃活動 記念撮影

## 河畔林植樹

上流域の沙流川キャンプ場や下流域にあるサーモンパーク内など、流域の広範な河畔林で、関係機関の指導を受けながら、エゾヤマザクラ・アカエゾマツ・オヒョウニレ・ハルニレ・イタヤカエデ・エンジュなどの植樹を行ってきました。

ふるさとの川に「さけ・ます」がたくさん戻ってくることを願いながら、良好な河川環境の維持を目指して植樹を続けています。



沙流川キャンプ場 エゾヤマザクラ植樹 間伐材での八掛支柱

創設当初に植樹した河畔は、今では立派な林に成長し、猛禽や小動物の繁殖地となっています。

国立公園化を目前に控え、流域全域が豊かな水辺環境を保ち、桜が咲き誇り人々が集える景観の創出を目指して植樹を続けています。

間伐材を利用した八掛支柱や、獣害防止ネットを取り付けたりと、維持管理の工夫や試行錯誤も重ねています。



ひだまりの里 エゾヤマザクラ植樹 獣害防止ネット

## ニホンウナギ

下流域の住民は昭和20～30年代に、ニホンウナギを日常的に捕獲していた経験を有しています。

中流域や支流（平取町や貫気別川）でもニホンウナギの生息証言が多数あります。

高度経済期以降、生活環境や習慣の変化などから捕獲は徐々に行われなくなり、長らく沙流川でニホンウナギを確認した住民はいませんでした。

「今でも、かつてと同様にニホンウナギが生息しているのだろうか」、「自らの手で確認したい」との思いで調査をはじめました。

初年度、令和元年調査では「昔取った杵柄」とばかり

に、ハエナワ・ドウを我流で仕掛けますが成果は得られません。



下流域でのハエナワ設置 ニホンウナギ生息調査

翌、令和2年度からは、河川生態系専門家とともに本格調査を行いました。



専門家帯同ニホンウナギ生息調査 電気ショッカーで生息確認

結果、令和2年には幼体を1尾、令和3年には15cmほどに成長した成体を2尾捕獲し、ニホンウナギの生息を確認することができました。



令和2年 ニホンウナギ幼体



令和3年 ニホンウナギ成体

沙流川はシシャモの水揚げ・産卵が特徴的な河川ですが、サケ・マス類も豊富に遡上します。

これに加えて、ニホンウナギも恒常的に生息するとなると、動植物・河川景観のバラエティは他に類のない個性的な河川と言えます。

ニホンウナギの生息調査を通じ、姿を変えつつある河川・自然環境においても、未来へ残すべき河川環境とはどのようなものか、私たちなりの答えを探す取り組みを続けています。

## ホタル

河口付近で沙流川に合流するオコタン川は、市街地近郊に位置しながら、ミズバショウの自生や、ヘイケホタルの自然繁殖など、良好な自然環境と住民生活が隣り合わせる稀有な環境にあります。

毎年7月下旬にはホタル観賞会を主催し、北海道の短い夏の風物詩を、多くの参加者に楽しんでもらいます。

家族で参加する子どもたちは、はじめて見るホタルを目で追いながら歓声を上げ、ふるさとの夏の情景を脳裏に焼き付けているものと思います。



ホタル観賞会参加者

ホタルにとって最適な生息環境を保全するには、「多くの生物が同時に生息できること」が重要との認識から、行政による環境配慮型の河川整備に参画・立案しました。

また、沙流川愛クラブによる手作り魚道を築造し、野鳥のための巣箱設置も同時に行いました。

地域にとって貴重な空間ですが、地域外の多くの人にも身近な自然を共有してほしいと考え、鑑賞会を継続しています。



野鳥巣箱設置

## 源流山づくり

源流域（日高町日高）では森林管理署のご協力・指導をいただきながら、トドマツなど針葉樹の枝打ちを行っています。



源流域 枝打ち活動

まさに日高山脈の懐での作業であり、「自らの水源の木々」が大きく育つことを祈りながら枝打ち作業を行います。

写真はハチやアブ除けの防護対策をして、枝打ち作業の説明を聞いた後、自分の背丈より高い場所まで手を伸ばし枝打ちしている様子です。



山腹に「ヒダカ」の針葉樹植樹

創設当初には、観光拠点から遠望できる山腹において、特に冬期間、常緑が浮かび上がるよう針葉樹を配置して、「ヒダカ」の文字を模した植樹を行いました。

現在は会員の高齢化などで、山腹での維持管理が難しくなっていますが、隠れた観光資源として現在も息づいています。

また、日高山脈を十勝側へ抜ける日勝峠の最源流域の魚道清掃にもチャレンジしてきました。

作業後は参加者全員で、支流千呂露川のほとりにある釣り堀での懇親会です。

ヤマベの塩焼き・唐揚げ、ニジマスの刺身で労をねぎらい、楽しみながら親睦を深めます。



日勝峠 魚道清掃

## 野鳥サンクチュアリとしても

沙流川流域全体にはオジロワシ・オオワシなどの大型猛禽類、河口域ではカワセミが確認されるほか、中流に位置する「にぶたにダム湖」では春先に北回帰のハクチョウの群れがにぎわうなど、流域のいたるところ、野鳥ファンには固唾の観察スポットが点在しています。

近年では、ペアラインと称されるお隣の鶴川に生息するタンチョウが、沙流川にもつがい飛来しており、近傍での営巣が確認されています。

野鳥に詳しく河川協力団体として共に活動する「ネイチャー研究会inむかわ」の皆さんと、沙流川流域でのタンチョウの営巣地調査や、野鳥観察会で情報を共有するなかで、鳥類においても地域資源としての重要な価値をあらためて知ることとなりました。



タンチョウ繁殖地調査



沙流川近傍 タンチョウつがい

## おわりに

沙流川愛クラブの活動をかいつまみお示しましたが、多くの資源にあふれていることがお分かりいただけたのではないのでしょうか。

北海道の水辺はその生態系のバラエティから、世界に冠たる水辺と称する声があります。

一方で、開拓期、戦後復興期から急速に開発が進んだこと、また近年の気候変動の影響により、水辺環境や水産資源が大きく変わりつつあります。

こうした中でも、沙流川流域に残される自然・河川環境は、地域住民にとっては「当たり前」の光景であり、ともすればその価値に気づけずにいることがあります。

アドベンチャートラベルに代表されるように、旅や余暇の習慣や流行が変わりつつあるさなか、日高山脈の国立公園化の契機が間近に迫りました。

沙流川愛クラブとして、沙流川流域の魅力と価値を地域内外の人に、どのように適切に伝え、また観光や体験など活用の観点で内外の人とどのように共有できるか、ということ問われる局面にあるのだと思います。

創設の精神を忘れずに、丁寧にしっかりと活動を継続してゆきたいと考えております。